

晚唐詩人韋莊における杜詩の影響

鳴海雅哉

一 はじめに

杜甫(七一―七七〇)は、唐代のみならず、中国文学史上、最も著名な詩人の一人である。後世、あらゆる詩人が好むと好まざるとにかかわらず、彼を意識しないわけにはいかなかった。

韋莊、字は端己(八四七―九一八)は、晚唐時代の詩人であり、彼ももちろん杜甫を強く意識していたし、杜甫に連なる者としてのゆかりもあった。以下、いくつか指摘できる杜甫との繋がりを挙げていこう。

まず、計有功撰、王仲鏞校箋『唐詩紀事校箋』巻六八(中華書局、二〇〇七)の韋莊の条の一部を見てみよう。

……後誦子美詩「白沙翠竹江村暮、相送柴門月色新。」吟諷不輟。是歲卒於花林坊、葬於白沙。

……後に子美の詩「白沙翠竹江村の暮れ、相送れば

柴門に月色新たなり。」を誦し、吟諷して輟まず。是の歳花林坊に卒し、白沙に葬らる。

韋莊が口ずさんでいた詩句は、杜甫の七律、「南隣」(『杜詩詳註』巻九。以下、本論で引く杜詩はこれを底本とする)の尾聯である。以下に原詩を引いておこう。

錦里先生烏角巾 錦里先生 烏角巾

園収芋栗不全貧 園に芋栗を収めて 全くは貧ならず

慣看賓客兒童喜 賓客を看るに慣れて兒童は喜び

得食階除鳥雀馴 階除に食するを得て鳥雀は馴る

秋水纔深四五尺 秋水 纔かに深し 四五尺

野航恰受兩三人 野航 恰も受く 兩三人

白沙翠竹江村暮 白沙 翠竹 江村の暮れ

相送柴門月色新 相送れば柴門に月色新たなり

成都に落ち着いた杜甫が、南の隣宅へ訪問したときの、安らかで穏やかな思いを描いた詩である。この詩の尾聯を

「吟調」して「轍」まなかつたことで、その愛好ぶりは明らかだろう。なお、葬られたのが「白沙」というのも、杜詩とのかかわりを思わせる。

それから、杜甫の旧居を探し当て、再建したというエピソードがある。それについて書かれた、韋荘の詩集『浣花集』の序文（向迪琮校訂『韋荘集』人民文学出版社、一九九八再版所収。以下、本論で引用する韋荘の詩はこれを底本とする）を見てみよう。なお、この序文は韋荘の弟、韋藹の筆である。

……辛酉春、応聘為西蜀奏記。明年、浣花溪尋得杜工部旧址、雖蕪没已久、而柱砥猶存。因命芟夷、結茅為一室、蓋欲思其人而成其処、非敢広其基構耳。藹便因問曰、録兄之稿草中或黙記於吟詠者、次為□□□、目之曰浣花集、亦杜陵所居之義也。……

……辛酉（九〇一）春、聘に応じて西蜀の奏記とする。明年、浣花溪に杜工部の旧址を尋ね得たり、蕪没すること已に久しと雖も、柱砥猶お存す。因りて芟夷を命じて、茅を結んで一室を為る。蓋し其の人を思いて其の処を成さんと欲するも、敢えて其の基構を広くするに非ず。藹便ち問日に因りて、兄の稿草中或いは吟詠を黙記せし者を録し、次して□□□と為し、之を

目して浣花集と曰う、亦杜陵の居る所の義なり。……この資料からは、韋荘が意識的に杜甫の旧居を探したこと、そして浣花草堂を再建したこと、元の草堂の基礎を尊重し、広げずにいたことがわかり、さらに、弟の韋藹は兄の詩集を『浣花集』と名づけたとしている。

さらに、韋荘が編集した唐人選唐詩集『又玄集』（蔡宛若注『唐人選唐詩六種』華夏出版社、一九九八所収）に載せる詩の中では、杜甫の作品が最も多いことから、韋荘の杜甫に対する高い評価はうかがえる。

また、近年の研究も、杜甫の影響に触れている。例えば李誼校注『韋荘集校注』（四川省社会科学院出版社、一九八六）の前言の一部で、韋荘の作品における杜甫の影響について、杜甫が生前「杜陵野客」（『醉時歌』卷三）と自称していたのと同じように、自らを「杜陵帰客」（『草江作』卷七）と称したこと、杜甫の草堂を再建したこと、死に際して杜甫の詩句を口ずさんでいたことから明らかであると述べている。

また、韋荘の作品に杜詩が影響を与えたと具体的に言及しているのは、広瀬智「唐代戦乱詩考―杜甫・韋荘の戦乱詩―」（奈良教育大学国文教育と研究」第二〇号、一九九七）である。広瀬氏は、杜甫の「三吏三別」詩と韋荘の

「秦婦吟」等の戦乱に関わる数首とを比較する中で、杜詩は戦乱の中で苦しむ民衆の悲惨なさまを描きながら、「決して唐王朝の勝利を信じて疑うことのない、悲劇の中にも唐王朝への希望を内包する」詩であるが、韋荘の詩には希望や前向きな感情が現れず、さらに官吏や皇帝を礼賛する詩句も見られないという。そして「唐王朝に対して期待することは無く、ただ悲嘆に暮れるのみ」であるとしながら、それでも「詩史」と呼ばれた杜甫の作詩姿勢を韋荘が継承しようとしたと述べている。しかし、この論は戦争に関わる詩のみを対象とし、また、印象的な評価に留まっている嫌いがあると考えるので、再検討が必要であろう。

さて、これらの周辺的なことから、韋荘自身に杜甫の影響があることは十分に予想される。では、韋荘の詩作に対し、杜詩はどのような影響を与えているのだろうか。本論では、韋荘の詩の中から、杜詩を意識していると考えられる詩を取り出して検討し、彼の詩作にどのような効果を与えているかを指摘しようと試みるものである。

二 韋荘詩における「杜甫」と「酒」

管見したところでは、韋荘が意識する「杜甫」または「杜詩」には、まず「酒」のイメージが重ねられることが

多い。まずは、それらの作品を引いて、考察していこう。

「杜甫」の名（杜子美、杜工部、杜少陵などを含む）を、韋荘の詩全三百二十三首中から検索すると、わずかに一例の詩に見られる。韋荘の七絶「漳亭駅小桜桃（漳亭駅の小桜桃）」（巻四）である。

当年此樹正華開 当年 此の樹 正に華開く

五馬僊郎載酒來 五馬 僊郎 酒を載せて來たる

李白已亡工部死 李白已に亡く工部も死す

何人堪伴玉山頽 何人か伴うに堪えん玉山の頽るるに

「漳亭駅」は「漳亭駅」とも書かれる。今の浙江省杭州市

市銭塘江の岸にあった駅のこと。「五馬」は太守の別称。

「僊郎」は「仙郎」と同じで、唐時代の尚書省各部の郎中・

員外郎の雅称。「玉山頽」は、『世説新語』容止第十四に書

かれる、山濤が嵇康の人となりを評した、「其醉也、傀俄

若玉山之将崩。」（其の酔うや、傀俄として玉山の将に崩れ

んとするが若し。）を踏まえ、酒に酔うさまをいう。

作詩の背景について、轟安福箋注『韋莊集箋注』（上海

古籍出版社、二〇〇二、以下「轟注」と略す）では、次の

ように指摘する。

……抛資治通鑑卷二五七、³⁾光啓三年三月、浙西軍乱、

節度使周宝奔常州。十月、錢鏐拔常州、擁周宝歸杭州。

十二月乙未（二十七日）、「周宝卒於杭州。」考異引実

録「錢」鏐迎至郡、氣卒於樟亭駅。」莊当亦随之南奔

本詩蓋作於光啓三年（八八七）春。

「周宝」とは、韋莊が長安から脱出した後に頼った人物で、

鎮海節度使だった。⁽⁴⁾ 韋莊は長安の惨状を描いた作品である

「秦婦吟」を彼に奉じたという。その周宝が反乱に遭い、

常州（今の江蘇省常州市）に逃げた。その後、錢鏐に保護

され、杭州に戻ったが、光啓三年十二月に「樟亭駅」で死

んだという。そして、韋莊も周宝の「南奔」に従ったはず

だとして、この詩を光啓三年春の作だと推定している。

しかし、この指摘には一部疑問がある。作詩時期が指摘

の通りであれば、まだ周宝はその時点では生存しているこ

とになる。韋莊が「樟亭駅」を詩題に据えるのには、周宝

の没地であるからだという。「轟注」の指摘だが、時系列に

従えばそうではなくなる。「南奔」とは常州から杭州に戻

ることであるから、それに従った韋莊が「樟亭駅」に行く

には、光啓三年十月以降でなくてはならない。以上のこと

から、「轟注」の作詩時期についての指摘は誤りで、この

詩は光啓四年春の作であるべきだと考える。

そうであれば、この絶句では、かつて周宝に陪席した宴

会を懐古しながら、「李白」や「工部」（杜甫）が死んでし

まった今は、誰が酔いに付き合ってくれるのだろうかと嘆

いている心情が詠じられていと解釈できるのである。こ

れは、李杜とともにあれば、自分の酔いや「南奔」の苦勞

は軽減されたのに、ということを示してもいよう。

また、詩中に杜甫の名前を詠み込んではいないが、詩題

が杜甫の五律「軍中酔飲寄沈八劉叟」（卷一三）の第一句

と全く同じであるという作品が、韋莊にはある。その五律

「酒渴愛江清（酒渴 江の清きを愛す）」（卷七）を次に引

こう。

酒渴何方療 酒渴 何れの方にか療さん

江波一掬清 江波 一たび清きを掬う

瀉甌如練色 甌はくちに瀉まげば練色の如く

漱齒作泉声 齒を漱げば泉声を作す

味帶他山雪 味は帯ぶ 他山の雪

光含白露精 光は含む 白露の精

只応千古後 只だ応に千古の後にちも

長称伯倫情 長く伯倫の情に称うべし

「酒渴」は、酒に酔つてのどが渇くこと。第三句は謝朓

「晚登三山還望京邑」（『文選』卷二七）の第五・六句「余

霞散成綺、澄江靜如練」（余霞散じて綺あやぎらと成り、澄江靜か

にして練ねりの如し）を踏まえ、瓶に注ぐ江の水の清澄なさま

を表現している。「甌」は小さい瓶。第四句は西晋の孫楚（？～二八二）の、「流れに漱ぎ、石に枕す」と言おうとして、うっかり「石に漱ぎ、流れに枕す」と言ったという「漱石枕流」（『晋書』卷五六）の故事の、言い間違える前の言葉「枕石漱流」を意識する。「伯倫」は、西晋の劉伶（二二二？～三〇〇？）の字で、竹林の七賢の一人。酒を大いに好んだことで知られる。

この詩は、酒に酔つてのどが渴いたときに飲んだ江の水のすがすがしさを詠じる詩である。首聯から頸聯にかけて、くり返し江水の清らかなさまをいい、酒酔いの者にとつては当然千古の後まで心に適うべきものであるとする。

この詩の題となっているのが、杜甫の五律「軍中酔飲寄沈八劉叟⁵」（軍中に酔歌して沈八劉叟に寄す）（卷一三）の第一句である。次に引こう。

酒渴愛江清 酒渴 江の清きを愛し
余酣漱晚汀 余酣 晚汀に漱ぐ
軟沙敲坐穩 軟沙 敲坐穩やかに
冷石醉眠醒 冷石 醉眠醒む
野膳隨行帳 野膳 行帳に隨い
華音發從伶 華音 從伶より發す
數杯君不見 數杯 君見ずや

都已遣沈冥 都て已に沈冥ならしむ

嚴武の幕中で酔つて沈八・劉叟の二人に送つた詩である。「敲坐」は傾いて座ること。「華音」は都の音楽。

仇兆鰲は「此詩不樂居幕府而作也。上四言草堂酔後、有倘佯自得之興。下四言軍中陪宴、非豪飲暢意之時。」（此の詩は幕府に居るを樂しまずして作るなり。上四は草堂に酔いし後、倘佯自得の興有るを言う。下四は軍中に陪宴し、豪飲暢意の時に非ざるを言う。）といい、杜甫の酔いの心境が「穩」から「沈冥」へと至るに従い、樂しめないものとなっているという。

韋莊はこの詩の前半の、仇兆鰲がいうところの「草堂酔後、有倘佯自得之興」の詩情をクローズアップして、酔いの過ぎたときには江水を飲むのがすがすがしいということを描いたといえよう。すなわち、杜詩では酔つた自らの様子を詠じているのに対し、韋莊の詩は酔後に飲む江の水に焦点を当てているということである。杜詩の前半の詩句と、韋莊詩の調子が似ていることから言えるのではないだろうか。

これらの他にも、杜詩を踏まえながら「酒」を詠み込んでいる詩を見ていこう。まず、韋莊の五律「紀村事」（村事を紀す）（卷三）を引く。

緑蔓映双扉 緑蔓 双扉に映じ

循牆一徑微 牆に循れば一徑微なり

雨多庭果爛 雨多くして庭果爛れ

稻熟渚禽肥 稻熟して渚禽肥ゆ

釀酒迎新社 釀酒 新社を迎え

遥砧送暮暉 遥砧 暮暉を送る

数声牛上笛 数声 牛上の笛

何処餉田帰 何れの処にか田に餉りて帰る

韋荘が立ち寄った村での、秋の社日の光景を描いた詩である。「新社」は、立春後および立秋後の第五の戌つちのえの日のこと。土地の神を祭り、豊作を祈る鎮守の祭りである。

「餉田」は、飯を田の中で働く者に持つていくこと。

この詩の頸聯は、秋の社日を迎えるために用意している酒や、どこからか聞こえる砧をうつ音を詠じることで、社日を迎えた豊かな村ののどかな様子を描写している。

この句は、杜甫の「遭田父泥飲美嚴中丞（田父の泥飲して嚴中丞を美むるに遭う）」（卷一一）全三十二句の第三・

四句を踏まえている。第一句から引こう。

步屣隨春風 步屣 春風に隨えは

村村自花柳 村村 自ら花柳

田翁遍社日 田翁 社日に遍れば

邀我嘗春酒 我を邀えて春酒を嘗めしむ

酒酣誇新尹 酒酣にして新尹を誇る

畜眼未見有 畜眼 未だ有るを見ずと

……

「嚴中丞」は、成都にやつてきた杜甫を、あれこれと世話した友人・嚴武のこと。「步屣」は歩くこと。「畜眼」は、自分の人物眼を謙遜するという表現。

ある農家で春の社日に酒をふるまってくれ、その折りに嚴武をほめたてる農夫と出会って作った詩である。引用した部分の後には、成都尹である嚴武のおかげで農夫の長男の兵役が解かれて帰宅したこと、杜甫をもてなす農夫の姿が成都尹たる嚴武の教化の賜物であろうこと、そのまま夜まで引き留められたことを描いている。

韋荘の「紀村事」では、この詩を意識しながら、自らが立ち会った村の社日のさまを詠じているのだろう。ここでも、杜詩を意識するのにも、「酒」が関わっているし、嚴武に触れた詩、つまり杜甫が穏やかで安定した生活を送ることのできた成都時代の詩を踏まえているということに注目したい。

次に、韋荘の七絶「中酒（酒に中る）」（『浣花集補遺』）を見てみよう。

南隣酒熟愛相招 南隣 酒熟して相招くを愛す

蘸甲傾來綠滿瓢 蘸甲傾來きしうかたむくれば 緑 瓢ひょうに満つ

一醉不知三日事 一たび酔いて三日の事を知らず

任他童稚作漁樵 任他まもあははあれ 童稚の漁樵を作すに

「南隣」は、冒頭に引いた杜甫「南隣」を踏まえている。

「蘸甲」は、手の甲にかかるくらい、なみなみと注いだ酒

の者に任せるという意味。この詩は、南隣の人と大いに酒

を楽しみすぎて「三日酔い」となってしまったが、それな

らそれで、子どもが家事をするのに任せよう、という意で

ある。

この詩の第一・二句は、杜甫の七律「客至（客至る）」

（巻九）の尾聯を踏まえているものと思われるので、以下

に引いてみよう。

舍南舍北皆春水 舍南舍北 皆春水

但見群鷗日日来 但だ見る 群鷗の日日来るを

花径不曾縁客掃 花径 曾て客に縁りて掃わず

蓬門今始為君開 蓬門 今始めて君が為に開く

盤餐市遠無兼味 盤餐は市遠くして兼味無く

樽酒家貧只旧醅 樽酒は家貧にして只だ旧醅のみ

肯与隣翁相對飲 肯て隣翁と相對して飲まん

隔離唯取尽余杯 籬を隔てて呼取して余杯を尽さしめ

ん

『杜詩詳註』（以下、『詳註』と略す）では「原注」として、

崔明府が立ち寄ったときの作であるとする。崔明府とは、

『詳註』の引く「邵氏注」によると、杜甫の舅（母の兄弟）

であるという。この詩では、杜甫宅へ客が訪れたとき、格

別なもてなしではないが、ゆつたりと、おおらかに対応し

ている情景を描き出している。第八句の「呼取」は呼ぶ、

招くことである。尾聯は、我々だけではなく、隣の人と

一緒に飲むのではないか、籬越しに老人を呼んで、残りの

酒杯を飲み干させよう、という意味となる。

草堂に住む杜甫の、平穏な日々的一面である。客とだけ

ではなく、隣家の翁も交えて酒を酌み交わすことのできる

ゆとりがうかがわれる。すでに引いた『浣花集』序には記

されないが、『唐才子伝』（巻十）の韋荘の記事には、彼が

草堂に住んだとあるから、再建した草堂で酒を飲む自身を、

成都時代の杜甫の姿に重ねて詠じたといってもよい。それ

は、韋荘にもゆとりがあったことを示しているとも言える

のではないか。

以上、「酒」のイメージが重なっていると見られる詩を引

やかな「酒」のイメージが重なっていると見られる詩を引

いてみた。「漳亭駅小桜桃」では、酔いに付き合うに足る者として「工部」を挙げ、杜詩「軍中酔飲寄沈八劉叟」の一節が題である。「酒渴愛江清」では、その杜詩の第一句のイメージを膨らませて、韋荘は詩を詠じていた。付け加えれば、杜詩の酔いは草堂での飲酒によるものであつて、韋荘はその印象を踏まえた、心地よい「酒渴」を味わつていた。

さらに、「紀村事」や「中酒」において、韋荘が杜甫と「酒」とを絡めて想起するとき、それらの詩に踏まえられているのは成都時代の杜甫であつた。しかもその「酒」は、安穩とした、のびやかな秀麗気の中で飲まれるものである。杜甫にも韋荘にも、ゆとりの感じられる詩と言えるのではないだろうか。

以上のことから、韋荘が「酒」とともに踏まえる「杜甫」は、「漳亭駅小桜桃」を除いて、成都に落ち着いた時期の、穏やかな暮らしの中にいる杜甫の姿であるようだ。流浪の果てに成都にたどり着いた韋荘にとって、杜甫は同じような辛酸を嘗めながらも安住の地を得た——杜甫はその地で終わらなかつたが——という点で最も共感できる先達だったのである。そのような視点で捉えれば、「漳亭駅小桜桃」においても、ともに酒杯を傾けたい相手としての「杜甫」

なのだとも言える。

三 韋荘詩における「杜甫」と「愁い」

前節では、韋荘が杜甫を意識するのに、「酒」を借りて、穏やかで、かつのびやかなイメージで詠じていた詩を引いて検討してきた。しかし、それらとは別に、「愁い」の情を詠じるのに、杜甫を意識している詩もある。本節ではそれらの詩を引いて、検討したい。

最初に、韋荘の五律「賊中与蕭韋二秀才同臥重疾。二君尋愈。余独加焉。恍惚之中、因有題。(賊中に蕭韋二秀才と共に重疾に臥す。二君尋いで愈ゆるも、余独り加うるのみ。恍惚の中に、因りて題する有り。)」(卷二)を見てみよう。

与君同臥疾	君と同一疾に臥すも
独我漸弥留	独り我のみ漸く弥留す
弟妹不知处	弟妹 処を知らず
兵戈殊未休	兵戈 殊に未だ休まず
胸中疑晋豎	胸中に晋豎を疑い
耳下闘殷牛	耳下に殷牛闘う
縦有秦医在	縦い秦医の在る有るも
懷郷亦淚流	郷を懷いて亦た涙流る

韋莊が黄巢の乱に巻き込まれ、病のために長安に滞在せざるを得なくなつたことを詠じた詩である。韋莊の詩はそのほとんどが制作年不明だが、この詩は黄巢の乱により長安が占領された広明元年（八八〇）に作られたものと思われる。「弥留」は病が久しく身に留まり、重くなること。

「晋暨」は、『春秋左氏伝』成公十年の伝に書かれる、晋の景公が、夢で疾病が二暨子となつて膏肓の間に隠れたのを見たという故事から、病魔をいう。「殷牛」は、晋の殷仲堪の父が耳の病にかかり、その結果床下に蟻の動くのを聞いて、牛が戦つていと聞き誤つたという、『世説新語』糞漏第三十四にある故事を表す。「秦医」は、いにしえの良医である扁鵲のこと。

頷聯にあるとおり、長安占拠の混乱の中、病を抱える韋莊は、弟妹と離ればなれになつたということがわかる。この箇所が、次の杜甫「遣興（遣興）」（巻九）の首聯を踏まえているので、見てみよう。

干戈猶未定 干戈 猶未だ定まらず

弟妹各何之 弟妹 各おの何くにか之く

拭淚霑襟血 涙を拭えば襟を霑す血にして

梳頭滿面糸 頭を梳れば满面の糸なり

地卑荒野大 地卑くして荒野大に

天遠暮江遲 天遠くして暮江遅し

衰疾那能久 衰疾 那ぞ能く久しからん

応無見汝期 応に汝を見る期無かるべし

「遣興」という詩題により、特別な状況を設定して詠じたのではなく、沸き起こつた興を放つように詠じられた詩であることがわかる。『詳註』では、「梁権道編在成都詩内。」とし、前後の詩から、上元元年（七六〇）頃の作だと推定できる。安史の乱中における、自らとその家族の行く末を思い、深く絶望していることのわかる作品である。

まず、この詩の首聯の二句を踏まえて、韋莊詩の頷聯が作られているのは間違いない。詩意はほぼ同じである。それだけではなく、詩人の状況も共通している。「遣興」第七句は、韋莊の詩題にある「恍惚之中」や、その詩の頷聯に通じている。「衰疾」によつて長く生きられまいと詠う杜甫の姿は、独り病の篤い韋莊を慰めたことだろう。このように、韋莊は「賊中与蕭韋二秀才……」の詩において、自身に降りかかった不幸を「遣興」の詩趣に重ねて詠じているのである。

しかし、韋莊が杜詩の趣きを踏まえている、といつても、作詩姿勢はもちろん異なる。「遣興」では、頷聯で広大な天地を描くことにより、彼の孤独感がより強く描かれてい

るのに対し、韋莊詩では自らの心中の不安を述べるにとどまるという点で、スケールが異なる。さらに、杜甫は詩を通して弟妹との再会を強く願うのに対し、韋莊は弟妹の不明に触れながら、自らの健康不安と望郷の念を訴えて詩を結んでいる。このように、思いが自己へ向かうという点は、韋莊の作詩の特徴として確認できるのではないだろうか。

さて、他にも同じく「愁い」を詠じるのに、杜甫を意識したと推測される詩に、韋莊「鑷白（白を鑷く）」（巻四）があるのを見てみよう。

白髮太無情 白髮 太だ無情なり

朝朝鑷又生 朝朝 鑷くも又生ず

始因糸一縷 始め糸の一縷に因るも

漸至雪千莖 漸くして雪の千莖に至る

不避佳人笑 佳人の笑いを避けざるも

唯慚稚子驚 唯だ稚子の驚くを慚ず

新年過半百 新年 半百を過ぐ

猶歎未休兵 猶お歎く 未だ兵を休めざるを

自らの老いをユーモラスに描くとともに、自身が五十歳を迎えようという歳になつてなお、戦の終わらないことを歎いている。詩題の「鑷白」は、白髪を抜くこと。

この詩では、結句の「未休兵」が、次に引く杜甫「月夜

憶舎弟（月夜 舎弟を憶う）」（巻七）を踏まえていると思われる。なお、「未休兵」という表現は、『全唐詩』中では杜甫一例、鄭谷二例、韋莊一例の計四例のみであった。

戍鼓断人行 戍鼓 人行断え

边秋一雁声 边秋 一雁の声

露从今夜白 露は今夜より白く

月是故乡明 月は是れ故郷に明らかならん

有弟皆分散 弟有るも皆分散し

无家问死生 家の死生を問う無し

寄书长不达 書を寄するも長く達せず

况乃未休兵 況んや乃ち未だ兵を休めざるをや

乾元二年（七五九）、官を捨て、秦州にたどり着いた杜甫が、安史の乱により離ればなれになって長らく会っていない弟たちを案じる詩である。広く知られる詩であるから、ここでは内容については深く言及しない。韋莊「鑷白」とは、「未休兵」、いまだ戦が終わらないと詠じているという共通点がある。

韋莊「鑷白」では、第七句まで非常に軽妙な表現を用いて詠じているが、結句に杜甫の一節をアレンジして用いることで、散漫な雰囲気を感じ、詩全体を引き締めているといえる。軽口のように自らの白髪について述べながら、結

びで杜甫の過酷な境遇と、それに起因する憂愁を暗示しているのである。つまり、前節で述べた、韋荘詩における「杜甫」と「酒」との穏やかなイメージとは異なり、杜甫の訴える嘆きの語を踏まえて、韋荘は詩を詠じているのである。韋荘は自身の境遇と杜甫の人生が重なることに、共感——互いに似通う境遇への連帯感——を覚えていると言えるのではないだろうか。

また、韋荘が「月夜憶舍弟」を踏まえていたことは、用韻の面からも指摘できる。杜詩の韻は「声」が広韻第十四清韻、「明」「生」「兵」が広韻第十二庚韻であるのに対し、「鐘白」の韻は「生」「驚」「兵」が広韻第十二庚韻、「莖」が広韻第十三耕韻と通用する。そもそも、「生」「兵」と同じ字を用いて詩を詠じていることから、杜詩を念頭に置いているといえよう。後代の次韻とは作法が異なるが、杜甫に倣った作品であることは間違いない。この点から、韋荘の杜甫への敬慕の念をうかがうことができるだろう。

さて、同じく杜詩の一節が用いられている韋荘「寓言（寓言）」（卷四）を見てみよう。

為儒逢世乱 儒と為りて世乱に逢う

吾道欲何之 吾が道 何くにか之かんと欲す

学劍已応晚 劍を学ぶは已に応に晩かるべし

歸山今又遲 山に歸るも今又遅し

故人三載別 故人 三載の別れ

明月兩鄉悲 明月 兩郷に悲しむ

惆悵滄江上 惆悵す 滄江の上

星星鬢有糸 星星として鬢に糸有り

当時の多くの者が憧れた官吏にならんと志した韋荘の、将来に不安と絶望を抱くさまが描かれた詩である。この詩の題である「寓言」の通り、韋荘はこの詩を通して不遇であることへの不満を訴えている。そして次の、杜甫「秦州雜詩二十首（秦州雜詩二十首）」（其四）（卷七）を意識して詠じていると思われる。次に引いてみよう。

鼓角緣辺郡 鼓角 緣辺の郡

川原欲夜時 川原 夜ならんと欲する時

秋聽殷地発 秋に聴けば地に殷もして発り

風散入雲悲 風に散じて雲に入りて悲しむ

抱葉寒蟬静 葉を抱きて寒蟬は静かに

歸山独鳥遲 山に歸らんとして独鳥は遅し

万方声一概 万方 声は一概

吾道竟何之 吾が道 竟に何くにか之かん

「月夜憶舍弟」と同じく、乾元二年（七五九）、秦州滞在の作である。官を辞した杜甫は、自らの将来の見通しの

ないことに絶望し、歎く心情を詠じている。韋莊も、この杜甫の深い歎きを下敷きにして、自らの将来に絶望を表現している。

まず明らかなのが、杜詩の結句「吾道竟何之」を踏まえて、韋莊は「吾道欲何之」と詠じていることである。自分はいかなる道を歩めばよいのか、との歎きが明確に描かれている。杜甫の陥った絶望に自らも直面していることを、杜甫の言葉借りて表現しているのである。また、杜詩の第六句「歸山独鳥遲」を承けて、「寓言」第四句では「歸山今又遲」としている。杜甫の場合は、遅々たる鳥の姿に自身を投影した象徴的な詠じ方であるが、韋莊の場合は直接的に自身の先行きの読めない、不安な感情を表現しているといえよう。

さらに、用韻においては、「秦州雜詩」では「時」「之」が広韻第七之韻、「悲」「遲」が広韻第六脂韻であるのに対し、「寓言」では「之」「糸」が広韻第七之韻、「悲」「遅」が広韻第六脂韻であり、「之」「遅」「悲」が同字である。前に引いた「鑑白」と同じく、杜詩を念頭に置いて詠じていることは間違いない。

以上のことから、韋莊が杜詩を借りて愁いを詠じるとき、前節で述べたような、成都時代ののどかな雰囲気の詩では

なく、秦州時代の杜甫の厳しい社会状況や生活状況の中から生まれた深い憂愁を詠じた詩句が下敷きとなっていることに注目できる。それらを踏まえて詠じられる詩句は、韋莊の痛切な叫びと言ってもよからう。

それに加え、韋莊の「鑑白」や「寓言」は、杜詩の韻に倣っていることも興味深い。これらのことから、韋莊の杜詩に対する意識の在り方は、非常に強いものであったということがいえるのである。

四 おわりに

本論では、韋莊が杜甫を意識していると思われる作品の中で、特に「酒」と「愁い」について詠じられた作品を検討してきた。

韋莊の、「杜甫」と「酒」のイメージを重ねた作品には、「潭亭駅小桜桃」を除けば、酒を前にして穏やかな心持ちの韋莊の姿が思い起こされる。それは、杜甫が成都にたどり着き、嚴武等に助けられて浣花草堂を建て、そこに住んでいた時期の穏やかさに通じよう。また、近隣の者との交流も、杜詩から発想を得て、そうさせたのかもしれない。韋莊の抱く「杜甫と酒」は、自らを癒し、他者との交流を温めるものとして存在していたと言える。

また、韋莊が「愁い」の情を詠じた詩において、杜甫の詩を意識するものが見られるのは、「愁い」の生じるその原因が似通っているということが言えよう。杜甫が安史の乱、韋莊が黄巢の乱に直面し、ともに弟妹を見失い、いまだ戦乱の終わらぬ状況下、自分の今後の展望を開けずにいるという、状況や境遇の類似がみられるのである。自らが尊敬する詩人と同じような境遇に陥ったからこそ、共感せずにはおれなかつたのであろう。

これらの点から、韋莊詩に対する杜詩の影響として、「酒」や「愁い」を詠じた詩においては、杜甫と自身の境遇を重ね合わせて心情を詠じようとしたという点や、後代の次韻のような形で韻を合わせた詩においては、韻を倣うことで杜甫への共感をより強く表そうとしたのではないかという点が挙げられる。また、杜甫の心境に通ずるものがあると、詩を読む者に思わせるという点で、効果があつたといえよう。韋莊詩における杜詩の影響の一部と考えてよいのではないかと考える。

注

(1) 任海天『韋莊研究』（人民文学出版社、二〇〇五）所収の「上編 韋莊伝略」第九章では、『浣花集』序の欠けた部分

について、「按、所缺三字当為『二十卷』と推定している。(2) 『又玄集』に掲載される二九七首の詩中に、杜甫の詩は七首を数え、最も多い。

(3) 聶注では『資治通鑑』巻二五七とあるが、実際は光啓三年三月までが巻二五六、四月からは巻二五七に載っている。

(4) 郁賢皓『唐刺史考全編』（安徽大学出版社、二〇〇〇）によれば、周宝は乾符六年（八七九）から光啓三年（八八七）まで、潤州刺史であり、鎮海節度使を兼ねていた。

(5) 『全唐詩』では、「一作暢当詩。」としている。しかし、『杜詩詳注』や韋莊の諸注釈書は杜甫の作としているので、それに従う。

(6) 傅璇琮『唐才子伝校箋』（中華書局、二〇〇〇）巻十に、「莊自來成都、尋得杜少陵所居浣花溪故址、雖蕪沒已久、而柱砥猶存、遂誅茅重作草堂而居焉。」とある。

(7) 聶注は、韋莊の編による『又玄集』にこの詩が選ばれていることを指摘している。

（函館工業高等専門学校）